



畑中幸子名誉教授の活動について

＝展示資料の充実化へむけて



畑中幸子名誉教授は博物館の前身にあたる資料室の立ち上げから、その後の収集や購入に長年尽力され、民族資料博物館の開館後も御自身で収集された資料を中心に展示や整理等についてひきつづき御協力をいただいています。

民族資料博物館は今年度より畑中先生をあらためて民族資料博物館のアドバイザーとしてお迎えし、運営会議にも御参加いただきながら御教示をうけることになりました。今回は畑中先生の当館における今後の計画を含めた活動の一端を御紹介します。

民族資料博物館がリニューアル開館して、何よりもまず必要な点は、展示資料への関心と理解を深めるため、資料に関する情報を充実させていくことにあります。そのための活動の一つが、年間二季に企画開催している連続講演（春季テーマ：民族学、秋季テーマ：素材学）です。

私は人類学研究者の立場から、当館の民族学関係での協力を依頼されています。連続講演のうち、昨年度のオセアニア地域（立教大学教授の豊田由貴夫氏）や東アジア地域（東京大学名誉教授の伊藤亜人氏）の研究者らの招聘にひきつづき、今年度の春季連続講演には、私の旧知の研究者として、大貫良夫氏（東京大学名誉教授、野外民族博物館リトルワールド館長）を副館長に推薦しました。大貫氏から快く承諾を得ることができ、館の発展に少しでも寄与されることがあるかと思えます。

一方、私自身の活動としては、主

要研究の対象としてきた地域はオセアニアとリトアニアで、現地調査資料を自宅に保管していたオセアニアのフィールドノート、統計資料を本学民族資料博物館収蔵庫に搬入し、これまで既に搬入済のスライドや写真ネガフィルムと合わせて当館の地域研究の参考資料にしていくため整理作業をすすめていきたいと考えています。

同様に私が収集に関与してきた各地域の展示資料についても、それぞれの保管状況を再確認しながら、名称や解説についても再度表記を専門研究の観点から確認していきたいと思っています。今年度は、オセアニア地域の祭礼用の木彫資料について欠損部分を補正するための貝殻や毛髪の素材を入手し、博物館内で作業を始めています。これについては、采澤真澄氏（民族資料博物館運営委員・現代教育学部幼児教育学科准教授）に接着剤や染料を用いた補修方法を3回

にわたり御教示いただきましたので、今後は私自身も作業方法を学びつつ進める予定です。ちなみに補修で用いる毛髪は実際の木彫に合わせて、パプアニューギニアの現地の人から収集することにしました。今秋に渡航の際に私が知人の娘から直接貰い受けることができましたのでこれからの補修に活用していきます。

その他、今後は、オセアニア地域の展示資料のうち石斧について、持ち手の部分と石器の接合には植物繊維でとりつけているのですが、年月の経過とともにゆるんでいます。この点は、春季連続講演でお招きした大貫氏の御紹介で考古学者にお願いをする予定です。実際に館内で石斧を手に取りながら補修方法を御教示いただくことを計画しています。

様々な分野の方から御協力を受けながら、その交流のなかで次の学習や計画に発展させたいと思います。

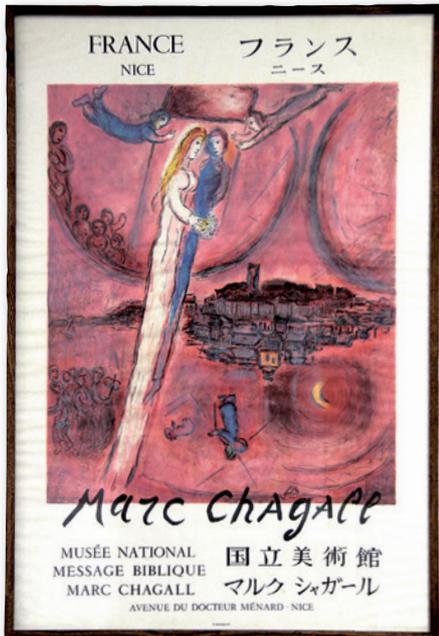
索引

- ◇巻頭
1 『展示資料の充実化へむけて』
中部大学名誉教授 畑中幸子
- 2 『学園探訪』シリーズ 第3回『ソロモンの雅歌』
学校法人中部大学学長 大西良三
- ◇2014 春季・夏季行事報告
4月 『特別講座開講三周年記念展』
日本美術院特待・中部大学民族資料博物館外部専門委員 下川辰彦
- ◇春季企画展示
5月 『わたしのこの一点・選りすぐられた資料』
中部大学民族資料博物館副館長 宇治谷 恵
- ◇2014 年度特別講座1
5月 『古典絵画講座』開催
中部大学民族資料博物館 原田千夏子
- ◇2014 年度夏季常設コレクション展示
7月 『文様とかたち』
中部大学民族資料博物館 原田千夏子
- ◇春季連続講演
5 『人類、環境、文明…オセアニア、ラテンアメリカ』
7月 第1回 『もう一つのクジラ論—オセアニアからの報告』
7月 第2回 『古代アンデスの環境と人間』
中部大学民族資料博物館副館長 宇治谷 恵
- ◇協力行事
8月 『文様を通して観る世界、文様をまとめてみるわたし—民族楽器を奏でよう！世界の民族衣装を試着して写真を撮ろう！吉祥文様でハッピーに！—』
国際文化化学科准教授 伊藤裕子
- 8月 『教育ボランティアフレンドシップ活動“あつまれ！わんぱく隊”』
幼児教育学科准教授・中部大学民族資料博物館運営委員 采澤真澄
- ◇トピック
8 『「コクサイ」を肌で感じた一日—春日丘高校国際コースと国際関係学部の連携授業を行ってみて—』
国際文化化学科准教授・中部大学民族資料博物館運営委員 中野智章

2014 下半年(秋季冬季)行事案内

第3回

がか
ソロモンの雅歌



参考作品：(原画) マルク・シャガール
印刷
77.5×53cm
(中部大学蔵)

Marc Chagall (マルク・シャガール、1887～1985)は、20世紀のロシア出身のフランスの画家。キュビズムや構成主義の影響を受けながら、故郷の風景や結婚をテーマに、透明感のある美しい色彩を組み合わせた作品を描き、別名「愛の画家」とも呼ばれる。戦後は聖書を題材にした作品も多く手がけ、パリ・オペラ座の天井画やエルサレムの病院の礼拝堂などがある。「雅歌」とは、ヘブライ聖書のなかの一編で、ソロモン王の作とされる恋愛と男女の賛美を歌いあげる歌。比喩的には教会を歌う内容として解釈されている。

民族資料博物館のアドバイザーを務めていただいている学園長より、構内の参考作品をめぐって交流を育まれてきた思い出をおうかがいするシリーズです。第三回の今回は「ソロモンの雅歌」についてお話をいただきます。

この作品は、1975年に国立シャガール聖書メッセージ美術館(現国立マルク・シャガール美術館)が日本向けのポスターとして採用したものです。「バラ色の人生」という言葉を思い出してしまうほど、この絵には、今まさに美しい人生の至福の「時」を喜び合う男女が、温かみのある色彩で充満する景色のなかで寄り添い合っています。本学の校舎の白い無機質な壁面にも、このような作品がたった一枚あるだけで華やいでみえるものです。この作品は人文学部棟の1階にある第三学生ホール前の入り口近くに掛けています。

家族や恋人、そして故郷を多くテーマとした画家としてシャガールは日本でもよく知られています。絵を観る人にとって自分自身の人生に重ねて感情を移入しやすいことも作品に近づく魅力があるのでしょうか。私は、彼の生涯を知ると、なおさらその作品をより好ましく見入るようになりました。

帝政ロシア領(現ベラルーシ)のユダヤ人家庭に育ったシャガールは、ロシア革命、第二次世界大戦といった時代の大きな波とともに、迫害を避けるためにヨーロッパ各地からアメリカにいたる「亡命」を繰り返しました。そして、平和な時代の到来とともに、彼は、ユダヤの聖地パレスチナを旅で訪れ、旧約聖書から題材をとるさまざまな作品制作にも挑みました。放浪を余儀なくされたその生き様から想像するに、常に彼は「自分とは何者か」と悩み問い続けたのではないのでしょうか。身近な家族から心の内の故郷へ、そして祖先の祈りの姿へと原点を深くみつめていくなかで、自分の拠りどころを探し求めた結果、多くの人々の心も癒す普遍的な対象へと受け入れられたのではないかと思うのです。

再び、この作品を観てみますと、愛の喜びの一方で、それは同時に有限の人生を知る瞬間でもあり、つまり二人を分かち瞬間がいずれ訪れることを

知る「無常」の苦しみを見出すことでもあるのです。まるでこのバラ色は、一方で夕焼けに感じる愁いの色でもあるようにみえてきます。人は誰もが自己探求の苦楽のなかで生き続けていて、そうした姿を心象として投影する何かに出逢うとき、勇気を得ることができると、彼の作品からも教えられる気がします。

キャンパスの一角に添えたいと決めましたのは、若い皆さんの胸に何か希望の灯をともすことができればという願いに尽きます。



2014春季夏季行事報告

4月

■ 特別講座(古典絵画)三周年記念展

「特別講座開講三周年記念展」

賛助出品：下川 辰彦(日本美術院特待・中部大学民族資料博物館外部専門委員)
出品者：特別講座受講生(平成23・24・25年度) 計22名

① | 会期 | 2014年3月20日(木)～4月10日(木)

| 会場 | 民族資料博物館 多目的室、1F エントランス

② | 会期 | 2014年4月16日(水)～4月20日(日)

| 会場 | 春日井市役所 市民サロン1F

過去三年間に講座内で制作した絹絵・板絵・日本画の各作品の制作発表展

民族資料博物館が大学博物館としてスタートを切った初年度から、生涯教育の実践の場を学内にて行いたいという館の要請を受けて指導講師をうけることにし、3

年が経過します。

今回は開講三周年記念展示ということで、過去に受講した受講生へも呼びかけ、希望者は展示スペースが許す限り、今季の受講生

とともに複数の作品を展示することとしました。このような展示内容については、私は院展の先輩方から御教示を受けたことがあります。

どのような作品においても、作者が数年かけて取り組んだ姿勢を、作品を並べることによって、成長も怠惰も視覚的に認識でき、また自分以外の他者の作品と一連の同じ時間を過ごした期間における各人の過程を一目に比べてみるができるということは、制作する者にとって何ものにも変えることのできない「現実」を直視することであり、次の段階へ進む「光」を瞬時に教えてくれる、展示自体が制作者にとって非常に勉強になるということなのです。この言葉を胸に思い出しながら、4月の講評会において出品者とともに展示室を鑑賞しました。

また、新たに会期を2回に分け、従来の博物館内での展示のほか、市役所のギャラリーをお借りし、初めて博物館を出て受講生の皆さんの作品を披露しました。この尾張地域も日本画だけでなく、油絵、水彩画、書道他、芸事が盛んで、それぞれのグループによる活動が非常に活発に行われています。このように外部の施設において展示することで、様々な地域のグループの人々に当館の特別講座における活動をより一層認知してもらいよい機会となりました。これもまた受講生にとって励みとなるでしょう。

この特別講座の受講生は、日本

画について全くの初心者から、20年余り続けているベテラン層まで様々で、その進行に応じて指導することは実は細心の配慮を図って対峙しています。そのような気配は微塵も気づかせてはいけないことは重々承知してのことです。それがまたプロとして向き合う作家である私の使命だと考えています。長い年月をかけて先人たちが継承してきた古画の技術を習得するには生涯をかけても難しいと思いますが、日本画の魅力を一人でも多くの人々に理解していただき、それをまた周囲へ伝播してってもらいたいという願いで取り組んでいます。(下川)



春日井市役所市民サロン内展示準備・展示風景

5月

■ 春季企画展示

「わたしのこの一点…選りすぐられた資料」

■ 期間 ■ 2014年5月16日(金)～6月30日(月)

■ 会場 ■ 民族資料博物館 多目的室

民族資料博物館では、学内外の民族資料に関する研究成果を体系的に紹介する企画展示を、多目的室をおもな会場として年に数回開催している。

今回の企画展示は、学内の民族資料博物館にかかわる方々が選りすぐった資料(1点ないし数点)を選びだし、それを自らの学識、ある

いは経験的な切り口で解析し、資料に新たな価値を付加する展示であった。学内の十名以上の方々から出品協力をえることができ、多様な資料や情報との出会いを実感し、今まで気づかなかった博物館資料の奥の深さを再発見することができた。また、クリスマスピラミッド資料(前田富士男特任教授・当

館運営委員選定)のように、常設展示資料を補充に資することができたことなど、その成果が今後の博物館活動の発展に貢献できたのではないかと推察される。

改めて、出品をいただいた皆様のご協力に深く感謝するしだいである。(宇治谷)



春季企画展示風景

「古典絵画講座」開催

■ 期間 | 2014年5月14日～7月30日 全12回
指定水曜日・午後1時30分～4時30分
■ 教室 | 10号館6階 106Jゼミ室

指導講師：下川 辰彦（日本美術院特待・民族資料博物館外部専門委員）



内容：絹絵・板絵・日本画の実技制作（一般対象・有料）定員15名

開講3周年記念展を4月まで行い、好評につき、新年度も本講座を開講することになった。本講座の特色をあらためて挙げるとすると、伝統文化について、直接的に素材を扱いながら作品に仕上げていく過程を通じて、その構造と精



制作風景

神的背景について理解を深めるとい文化教養の向上を目的としている。日本画という絵画の分野には、彩色に用いる墨や顔料、染料は、もとは天然の鉱物や植物を原料とするほか、接着剤の用途として用いる膠や、基底材となる和紙、そして筆もまた、もとは天然素材から作られてきた伝統的な材料であり、大陸から伝来した技術を長い時代をかけて日本の風土にあわせ表現方法が発達してきたという歴史がある。このことから、日本における伝統文化理解のための方法として、この絵画制作をもとにすることが一つの意味がある。

そのなかでも、本講座は、日本美術において、平安時代以降の仏画に発達した金箔を用いた絹絵の裏彩色や、江戸時代の琳派等における胡粉や墨の効果的な用い方に

よる表現技法等、普通、専門大学や研究所以外では学習することができない内容を、指導講師が実際に手を動かして指導する点が他の関連文化教室とは一線を画している。

一方で、受講生は、絹絵、板絵、日本画における基底材による制作作品を選択し、各自が制作進行を決めることができるようにしているため、指導講師は、一つの講座のなかで古画研究から現代作品まで幅広く指導にあたるというカリキュラム内容をとっている点でも独自の特徴をもっている。これまでの講座における学習風景は、全員が非常に熱心に取り組み、毎回表情を輝かせて本学に通い続ける人々の表情をみてきた。今年度も新たな面々を加え、どのような作品が生み出されるか楽しみである。（原田）

「文様とかたち」

■ 期間 | 2014年7月8日(火)～8月10日(日)
■ 会場 | 民族資料博物館 多目的室

収蔵資料を紹介するためのテーマ展示として始めた常設コレクション展示も、今回で4回目となる。「文様」に焦点をあてることとし、世界の様々な国、地域、民族において、伝統的な「かたち」を調べることにした。

展示においては、伝統的な文様の図柄のなかに共通性を見出し、ながめてみることによって、大自然と向き合うなかで人間が発想してきた普遍的な感性について感じ

取ってみたいと思い、主な文様の種類をとりあげてみた。各国の王家の紋章や日本の家紋のように、一族の成り立ちに関わる象徴的なかたちをシンボルとして、デザインに象られて継承されてきたものも多い。

その「かたち」は、その共同体の絆を深める役割をしてきた。世界各国の工芸品や民族衣装には、民族のアイデンティティの「祈りのかたち」として、植物や動物の



夏季常設コレクション展示チラシ

姿に託して、豊穡や繁栄への願いが込められている。

そこで世界の古典的な文様の種類を紹介する解説パネルのほか、当館の展示資料にも類似したデザインをかたどっている54点もの事

例を地図上で確認できるように、資料写真を組み込んだ地図を新たに作成し、シルクロード文化圏上に分布し伝来してきた主な変遷を比較できるように試みた。またパネルの地図と写真画像に共通の番号を付け、常設展示内の資料番号表示をこの展示用に新たに設置し、両者を照合できるようにした。このことで、館内の展示位置との関連性をもたせながら、来場者に鑑賞してもらおうねらいであった。また各国の文化的背景を大きな時代区分のなかで把握できるように、高校の世界史の参考教材を活

用して比較文化研究のための資料として、年表やパネルに仕上げて展示に加えた。その他、児童向けに、展示資料の写真画像をもとに手書きで文様のかたちの概観をかたどった白描図を数種類作成し、塗り絵用に多目的室内に用意することも試みた。

展示内容としては、世界史を学習した高校生以後の年齢層を対象としているが、それよりも若い年齢層については、実際の博物館の展示空間のなかから、花や動物のかたちを発見する「意識」と絵を描くという「行為」から、直接的



に資料に触れる体験を増やしていくことも情操教育へのきっかけとして提案したいと考えた。結果、鑑賞の対象者を幅広い年齢層に向けての方向を試みたが、全体をとおしての所感は、解説およびパネルレイアウトの表示サイズやデザインのバランスをさらに検討し、展示空間に設置した場合の視覚的効果

をより考えることで、展示によって伝達したいテーマをより明確に打ち出すことができると思われ、教材研究について今後のさらなる課題をあらためて強く実感した。(原田)



夏季常設コレクション展示風景

7月

■ 2014 春季連続講演

「人類・環境・文明… オセアニア、ラテンアメリカ」

■ 連続講演 1 | 7月16日(水) 15:30 ~ | 中部大学リサーチセンター 大会議室

講師：秋道智彌 氏 (総合地球環境学研究所名誉教授)
司会：宇治谷 恵 (民族資料博物館 副館長)

もう一つのクジラ論—オセアニアからの報告

秋道先生は京都にある地球環境学研究所の副所長の要職を担われたとともに、大阪の国立民族学博物館の名誉教授を勤めておられる。アジア・太平洋地域研究の著名な人類学者であり、クジラを中心とした生物と人のかかわりあいや、地球環境の課題など、さまざまな「生き物」に関する提言をされている研究者であることも明記しなくてはならない。

講演内容は、クジラと「捕鯨」の歴史と課題、及び資源としてのクジラについて詳細なデータ

をもとに紹介された。特に先住民や伝統地域の人々の「生存捕鯨」や「小型捕鯨」のあり方については興味あるものであり、欧米の価値観との相違をわれわれがどう解釈するのかという大きな課題を提示されたと思われる。考えなくてはならないのは、先住民捕鯨、商業捕鯨、反捕鯨という対立の視点ではなく、クジラ類の保全と持続的利用、地域文化の継承をいかに存立するかを考えなくてはならないとの指摘であった。この指摘は、これからの日本がどのようにこの地域と関係を進めるか、あるいは国際社会でのあり方、そして宗教とは何かを考えるうえで貴重なお話であった。講演終了後には、参加者からも熱意ある質問や意見があり、今後の研究を継承・発展させるうえでも有意義な講演会となった。(宇治谷)



講演の様子



春季連続講演チラシ

講師：大貫良夫 氏 (東京大学名誉教授 野外民族博物館リトルワールド館長)

司会：宇治谷 恵 (民族資料博物館 副館長)

古代アンデスの環境と人間

大貫先生は、現在も、ペルーにもご自宅を持ちつつアンデス研究を継続されている稀な先生である。先生は、わが国だけでなく世界から、アンデス地域における考古、人類研究といえば、大貫先生と呼ばれており、アンデス研究をリードされている世界的な第一人者の研究者である。

講演では、インカ帝国から、今日の近代国家としてのペルーにいたるまでを、自然や文化の変容

などについて、環境や食文化及び人類史の視点から紹介された。具体的な事例として、ジャガイモなどの芋栽培やピーナツやとうもろこしの栽培、そしてリヤマ、アルパカなどの家畜の変遷についての紹介があった。さらに、大貫先生が自ら考えられている「神殿」と「都市」との成立と発展に関する視点を「遺跡」からどう読み取るか。あるいは、収集された「遺物」の持つ情報をどのように解釈するのかなど、アンデス文明を考えるうえで貴重な指摘であった。またわれわれ現代社会に暮らす者にとって、この講演は、現代文明や都市文明とは何かという大きな課題を改めて考えるうえでよい機会でもあった。先生の熱弁は時の経過を忘れるものであり、予定終了時間を超えても、多くの参加者は席をたたなかつたのである。(宇治谷)



講演の様子

8

月

■ 協力行事

オープンキャンパス

■ 国際文化学科オープンキャンパス分会场

┃ 期間 ┃ 2014年7月19日(土)・8月8日(金) ~ 9日(土)

┃ 会場 ┃ 民族資料博物館『民族衣装と楽器』特設コーナー

「文様を通して観る世界、文様をまとってみるわたし

—民族楽器を奏でよう！世界の民族衣装を試着して写真を撮ろう！

吉祥文様でハッピーに！—

伊藤裕子 (国際文化学科 准教授)



現代の洋服にはなかなか無い事が多いが、民族衣装、日本でいえば和服などに目を凝らしてみるとある、そこかしこにある、文様。刺繍によるもの、染色によるもの。敷物、壁紙、陶器や身近な生活用品から、博物館の様々な民族の工芸品にいたるまで、同じ形や異なった無数の形が無限に繰り返され、それらの表面を覆い尽くす。それはつるんとしたのっぺら

ぼうにの表面に対抗して、多様な表情あるいは記号を「もの」に与えるのである。

英語で文様とは“pattern”であるがその語源は中世ラテン語“patron”、すなわち手本や規範となる人とのことである。文様とはある種の規範をもたらす記号なのであり、そうした文様を身にまとふことは、異なる文化的規範に自らを置いてみることに等しい。

吉祥などの意味のこめられた文様を身近に使うことが少なくなった今、文様展では改めて「もの」の表面にこめられた未来への願いに気付く。

さて今年度も、国際関係学部の7月、8月のオープン・キャンパスにおいて、中部大学民族資料博物館の協力を得て、文様展を分会場とし、訪れた高校生方に、民族衣装を試着してもらったり、民族楽器を奏でて、異文化を味わってもらった。

殊に国際文化学科を志望する高校生の中には世界の民族に興味の

ある生徒も多い。民族資料博物館の特色である、文化を肌で感じるといった展示の在り方のお陰で、他文化をより親しみやすいものとしてとらえ、興味を深めたことと思う。



民族衣装を試着

高校生も吉祥文様をスマホにおさめてハッピーな気分になったことであろう。

博物館職員の方々には、様々なご協力をいただき、厚くお礼を申し上げます。(伊藤)

現代教育学部

|| 期間 || 2014年8月9日(土) 午後

|| 会場 || 常設展示室

教育ボランティアフレンドシップ活動「あつまれ！わんぱく隊」

講師：采翠真澄(幼児教育学科 准教授)・三品陽平(同 助教)

平成26年8月9日土曜日、第4回フレンドシップ「あつまれ!! わんぱく隊」が開催され、今年度も地域の子どもたち66名が学生と共に中部大学民族資料博物館を訪れました。

この企画は学生が子どもたちに「世界にある様々な国の歴史と文化に直接見て、触れて、感じることで世界に興味を持ってほしい」との願いを持って準備してきたものです。

今年は「わんぱく世界ツアー」と称し、子ども達を小グループに分けて民族資料博物館の各地域ごとに分けられた展示ブースに案内しました。それぞれのブースでは民族衣装を身に纏った学生が現地の歴史や文化を話しながら、実際

に民族資料博物館が所蔵する楽器や衣装、生活用品を紹介していききました。

学生たちは、子どもたちが如何に楽しく、興味を持って民族資料博物館の展示物に関わり、そして世界の国々に興味関心を持つようになるにはどうしたら良いのか、子どもの気持ちになって企画案を練り上げました。その一環として、学生は担当する地域の歴史や文化を調査し、また館の収蔵品については学芸員の方から丁寧に説明を受け、教材研究を念入りに行っていました。

その結果、子どもたちは珍しい世界の文化や展示品に直に触れ、驚きや喜びを子どもらしく素直に表情に現わし、正に興味津々とい

う様子でした。

こうした普段できない経験を得ることこそ、「わんぱく隊」に参加する子どもたちとその保護者の願いであり、その貴重な経験は彼らの「人」を育む上での糧になっていきます。そしてこれは映像や「ニセモノ」では感じることでできない、民族資料博物館の所蔵する「本物」があってこそ出来る経験です。

保育者・教員を目指す学生たちが、「本物」である展示物によって子ども達と繋がり、学び育ち合うこの企画は、正に地域と民族資料博物館が一体となって教育を行う企画であったと実感しています。

(採翠)



「わんぱく隊」 真剣な眼差しで学生の話聞く子どもたち

高校大学連携授業

「コクサイ」を肌で感じた一日： ～春日丘高校国際コースと国際関係学部の連携授業を行ってみて

中野智章（国際文化学科 准教授）

2014年6月9日に、春日丘高校国際コースの1～3年生を対象とした連携授業を実施した。今回は昨年とやや趣向を変え、中南米地域をあらかじめさまざまなテーマ毎に調べてきている高校生の皆さんに、同地域を専門とする国際関係学部の田中高教授がレクチャーを行い、その後で質問を受ける第一部と、ついで民族資料博物館を訪問し、実際に現地で用いられている品々を見ながら学びを深める第二部とで授業を構成した。

第一部では、20問ほどのクイズを交えながら田中高教授が中南米の社会情勢や日本とのつながりなどを幅広くかつ分かりやすく紹介し、国際コースの生徒諸君からは、正解が発表される毎に大きな歓声が上がった。



最後の質問コーナーではやや気恥ずかしさも見られたのか、思ったように手は上がらなかったものの、大学における学びの一端を実感してもらえたようで、みな表情が非常に明るかったのが印象的であった。

その後、広いキャンパスを歩きながら民族資料博物館に到着すると、そこでは各地域ごとに国際関係学部の教員が生徒のみんなをまさに「待ち構えて」おり、目の前にある資料の特徴や、そこからわかる現地の文化について紹介するといった、中部大の国際関係学部が誇る親密な授業の一形式を体験してもらった。そして説明をただ聞くだけではなく、民族衣装を実際に身に纏ってみたり、楽器を演奏してみたりと、普段教科書でふれている文化を「じかに」体験することで、「コクサイ」を肌で感じてもらえる一日となったようである。

最後には、図書館前で生徒代表や先生方から丁寧な御礼のご挨拶も頂き、またの再会を約束して授業を終えた。

今後は国際関係学部の学生も交え、例えば特別展の企画や展示を共に行ってみるのもよいのでは、と新たな授業案を思い描くことができた。（中野）

◇秋季企画展示

春日井キャンパスの50年

会期：平成26年10月7日(火)～12月19日(金)

◇秋季連続講演(連続2回)

数寄空間の成立と展開について

第1回講演：平成26年10月16日(木)「“市中の山居”からのメッセージ」

尼崎 博正 氏 (京都造形芸術大学教授)

第2回講演：平成26年11月26日(水)「数寄屋像の多様性—近世から近代へ」

矢ヶ崎善太郎 氏 (京都工芸繊維大学准教授)